今田高俊・友枝敏雄 編

村上陽一郎『科学のダイナミックス』(サイエンス社) や佐和隆光『虚構と現実』(新曜社) がポイントを突いていて興味深い。これらの書物を読めば，社会科学の現実との関わりについての知識も身につく。

▶その先の専門的な議論については，本章で引用した諸文献にアタックしてみよう。社会学の方法をマスターするには，コントの実証精神論，ウェーバーの理解社会学の方法，デュルケームの社会学的方法の規準に関する議論を知っておくことが不可欠。なお，本章で紹介した方法の3類型を統一する問題にアタックする意欲をもったなら，拙著『自己組織性』(創文社) の「メソドロジーの三角形」と「変換理性」の議論を参考にして，挑戦してみよう。他人の意見を学ぶだけでなく，自分の頭で考えてみると，知識も本物になる。

◆今田高俊

「社会学の基礎」有斐閣Sシリーズ pp. 33-55 1991年5月30日発行 有斐閣

1991-15-1/6

2 社会学と隣接諸科学

1 はじめに

本章で学ぶこと

前章で，社会を「科学」する探偵の，コツと勘どころがわかったろうと思う。おさらいの意味で，もういちどまとめておく。

(1) 何気なく見過しがちなところに，大きな「謎」を発見するセンスが，まず大事。

(2) つぎに，その謎に，食いついて離れない，知的好奇心が旺盛であること。

(3) 最後に，その謎を，どこまでも追いつめていける学力（社会科学の方法論）がそなわっていること。

(1), (2)なら資格十分という読者のあなたも，もしかすると，(3)にはあまり自信がないかもしれない。探偵だってそうだが，学問にも年季が必要だ。犯人の捕まえ方も知らないのに，いきなり大手柄をたてようとしても無理である。

1991-15 1/6

本章ではこの(3)，つまり，あなたが見つけた謎を追いつめて，料理するための方法論について説明しよう。

これは，たとえていうなら，探偵の七つ道具みたいなもの。社会の謎解きに取り組んできた先輩たちは，とっておきの，いろいろな分析のテクニックを残してくれている。これを仕入れて，わがものにするにはどうしたらいいかを説明するのが本章の目的だ。

社会学と社会科学

社会学は，社会を科学する学問である。けれども，社会を科学する学問は，社会学だけじゃない。政治学も，そう。経済学も，法学も，人類学も，そう。国際関係論だって，教育学だって，そう。……これらを全部ひっくるめて，「社会科学」と呼ぶ。

そのほかにも，ふつうは社会科学に入れない，言語学だとか，哲学，心理学，文学，音楽学みたいなものだって，じつは社会科学に関係が深い。社会の謎解きには欠かせないものなのだ。

これらの学問は，おのおの独自に，社会を分析する方法をもっている。目的に応じて，これを使ったり，あれを試したりすると，うまく謎が解けるかもしれない。だから，とりあえず，七つ道具みたいにひと通りマスターするつもりでいよう。相手は手強い。使えるものは何でも，使ったほうがいい。社会学と，それ以外の社会科学（隣接科学）は，歴史的にいっても，つながりが深いのである。せっかくギャングを追いつめたのに，州境を越えて逃げてしまったので，すごすご引き返す保安官，みたいなドジなことになりたくなかったら，隣接科学にもちゃんと目配りしておくべきだ。

2 社会学と隣接科学

社会学の創始者・コント

社会学は，産声をあげた当初から，隣接の学問と縁が深かった。

世界で最初に，「社会学」の看板を掲げたのは，コント。彼はもともと哲学を勉強した人で，そのあと社会学を始め，のちに宗教にも傾倒した。『実証哲学講義』(Comte, 1830-42) という大きな本を書いたので，フランスではむしろ，哲学者として名が通っている。

コントは，サン＝シモン（初期の社会主義者）の弟子でもある。大革命の嵐が過ぎ去り，理性万能の風潮も熱が冷めたあと，19世紀のフランスは，ようやく産業革命が本格的になっていた。勃興しつつあった市民階級は，自分たちの社会を冷静に認識する，合理的な社会観を必要としていた。

それに先立つ18世紀は，啓蒙主義の全盛時代である。人びとは，理性を絶対視していたから，百科全書みたいなオールラウンドの知識ばかりを求め，社会だけを研究する特別の方法論にまで注意が向かなかった。ゆえに社会学も存在しなかった。

それに対して，19世紀は，実証主義 (positivism) の時代。ある主張をするには，必ず証拠や論拠を与えようとする。それでこそ，社会の「科学」といえるだろう。

コントの仕事は，そういう社会思潮をふまえたものだった。彼

1991-15-2/6

★スペンサー　初期の社会学者の一人。イギリス人。社会進化論を唱えた。彼の『総合哲学体系』は，宇宙全体を進化の論理で説明しようという膨大なもの。その一冊である『社会学原理』では，社会進化の観点から，「軍事型社会から産業型社会へ」を唱え，人間の自発性や自由が拡大していくのが社会発展の必然であるとした。彼の著書が評判になったのが，ちょうど明治維新の時期だったため，日本でもよく読まれ，自由民権運動にも影響を与えたといわれている。

は，これからは科学の時代だから，実証的精神が大切だと大いに強調した。そして人類社会は，神学的段階→形而上学的段階→実証的段階の順に発展していくという，ちょっと怪しげな「コントの法則」を唱えた。

もう一人の創始者・スペンサー

もう一人，社会学初期の巨人に，スペンサー〔★〕がいる。彼は，『社会学原理』(Spencer, 1876-96) という，これまた大きな本を書いた。中身は，進化論をもとにした社会学である。細胞から天体まで，全宇宙を貫く原理として，進化の法則があると考え，それが社会の発展――軍事型社会から産業型社会へ――も説明する，とした。

進化論というとすぐ，ダーウィンの『種の起源』(Darwin, 1859) が頭に浮ぶ。メンデルの遺伝の法則とか，モルガンの突然変異説なんかもあった。でも，スペンサーがこの本を書いたのは，『種の起源』よりも早い。つまり，ダーウィンの学説と関係なく，19世紀のはじめごろからずっと，進化論は流行の思想だったのだ。明治維新のころそのブームはピークに達して，進化論・イコー

■ コラム 3・社会進化論

社会も生物と同じように，単純なものからより複雑なものに変化していく，とする考え方。スペンサーがこの説を唱えたのは，ダーウィンの『種の起源』より早かった。つまり，生物学の進化論が確立する以前に，19 世紀の時代思潮である進化の思想が，社会学を捉えていたのである。この思想は，産業文明がどこまでも発展すると信じる楽観的な見方を反映していた。マルクス主義（とくにその歴史観）にも，社会進化論の影響がうかがわれる。また，生存競争の考え方をそのまま社会に持ち込み，社会淘汰を唱える，社会ダーウィニズムの考え方も，社会進化論と発想が似ている。その後，20 世紀に入ると，社会を生物のアナロジーで捉えるのは単純すぎ，問題が多いと考える学者が増え，社会進化論はいったん勢力を失った。比較的最近では，パーソンズやルーマンが，社会進化に新しい表現を与え，理論的に再生させることをはかっている。

ル・科学，みたいに思われていたほどである。だから明治の知識人は，スペンサーの社会学の本をよく読んで，勉強していた。当時の社会思想を理解するのに，スペンサーの学説は参考になるだろう。

同時代の重要な思想家に，マルクスがいる。彼の仕事をみても，進化論がどれほど大きな影響を与えていたかがわかる。

余談になるが――　マルクスの思想やマルクス主義は，ふつう社会学に含めない。けれどもこれは，あらゆる角度から，社会の謎を解き明かそうという野心的な試みなのだ。哲学，経済学，歴史学……にまたがるマルクスの体系は，当時の最新・最高水準の学問だった。ここから，社会学が学んだものも，また大きい。マルクス主義に対する理解なしに，現代の社会学を語ることはできないだろう。たとえば，アドルノ，ホルクハイマー，ハーバマスなどのフランクフルト学派や，アメリカの社会学者ベル，日本の見田宗介の理論などには，直接間接の影響をみることができる。

1991-15-3/6

★パーソンズ　アメリカの社会学者。経済学を学び，M. ウェーバー研究を経て，独自の理論を展開した。『社会的行為の構造』では「主意主義的行為理論」の重要性を確認。『社会体系』などでは，社会をパーソナリティ／社会／文化の 3 システムの複合と捉えた。さらに，システムの機能要件が，適応 (adaptation: A)，目的達成 (goal-attainment: G)，統合 (integration: I)，潜在機能の維持 (latency: L) の 4 つであるとする構造＝機能分析を展開し，わが国の社会学にも大きな影響を与えた。

構造＝機能分析への流れ

社会学をリードする学者たちは，その後も，隣接する領域から多くの刺激を受けながら仕事をしてきた。そこで，ちょっと間をとばそう。20 世紀に入ってから，社会学に押しよせた大きな波は 2 つある。1 つは，1950 年代の行動科学 (behavioral science) 運動。もう 1 つは，1970 年代からの構造主義，意味学派などの流れである。

行動主義 (behaviorism) は，もともと心理学の研究方法である。物理学にならって実験を重視し，操作的に定義できない概念（たとえば，人間の心や自己意識）を使ってはいけないと考えた。この行動主義を中核にして，50 年代に急速に発達したコンピュータ科学，情報理論，システム論，サイバネティックスなどを統合しようとする運動が，行動科学運動である。この運動は，時期尚早だったのか，その後だんだんしりすぼみになっていくが，社会学の「構造＝機能分析 (structural-functional analysis)」に，決定的な影響を与えた。

構造＝機能分析は，今世紀を代表するアメリカの社会学者パーソンズ〔★〕が，1950 年代に唱えた理論である。その骨組みを簡単にいうと，次のような主張だ――社会は，多くの要因が複雑に結びついたシステムである。そこには一定の秩序，すなわち変数のあいだの安定したパターン（社会構造）がみとめられる。これを，機能 (function) の観点から分析することができる。

これは，社会を一般的に説明できる枠組みに見えたので，ちょうどよい理論がなくて困っていた，アメリカをはじめとする世界中の社会学者たちに歓迎された。60 年代から 70 年代にかけては，わが国でも，もっとも標準的な理論として，学界の主流だった。

構造＝機能分析は，いろいろなところにアイディアの源泉をもっている。パーソンズ自身が語るところによっても，まず，マリノフスキーら人類学における機能主義の流れ。パーソナリティ（人格のシステム）の理論には，フロイトの精神分析の影響もある。組織がだんだん機能分化をとげていくというのは，小集団の実験にもとづくもの。システムの発想（とりわけ，多変数のシステムや，均衡の概念）は，近代経済学によっている。このように多くのヒントを吸収し，構造＝機能主義は，社会をもっとも一般的に説明する図式であることをめざした。

この構造＝機能分析は，とくにわが国の学者の努力で，その論理構造がすっきり整理されていった。その成果は，たとえば，青井和夫編『理論社会学』(1974) にまとめられている。

構造＝機能分析への反動

さて構造＝機能分析は，こうして広く受け入れられるにつれ，

1991-15-3/6

しだいに非難・攻撃も浴びるようになった。その理由は，当時の時代背景を知らないとわかりにくいが，おおむね次のように考えることができる。

構造＝機能分析は，社会システム論の一種である。社会システム論は，多くの変数の複合によって社会を説明する理論である。これこれこうだから，社会はこのような状態になる（均衡する）という，一種の決定論のかたちをとる。

これはこれでいいのだが，パーソンズは，個々人（社会を生きる人間主体）も，社会システムの一種であるとして，それも同時に説明しようとした。そうすると，個々人の人格のあり方（パーソナリティ・システム）も，社会的に決定されると考えなければならないことになる。

パーソンズはもともと，人間が，主意主義的（voluntaristic）な存在であること，意味を生きる自由な主体であることを強調していたはずだった。けれども，構造＝機能分析の描く人間は，社会の与える意味や規範をそのまま取り込む，ロボットのような存在に近くなってしまう。社会には，実現すべき目標（機能）や，それに向けて自動的にシステムの均衡状態を達成するメカニズム（構造による制御，価値の内面化＝社会化）がそなわっていて，個々人を有無を言わさずその枠にはめてしまう。そんなふうな社会のイメージはまっぴらだ，と考えた人びとが多かった。

そこで，構造＝機能分析に対抗し，人間の主体性や，意味を理解できる能力を復権しようという動きが現れてきた。それが，ちょうど60年代後半からの，異議申立ての波に重なって，いわゆる「意味学派」の登場となったわけである。

3　ポスト構造＝機能分析の時代

構造＝機能分析の全盛期は，今から20年ぐらい前のことだった。

70年代以降の社会学は，いうなればポスト構造＝機能分析の時代，吉田民人のいい方をかりれば「意味学派」のミニ・パラダイムが乱立する，理論の戦国時代である（今田高俊，1986参照）。

最近アメリカで有力な，主だった学派を挙げてみるだけでも，シュッツ〔★〕に始まる現象学的社会学（phenomenological sociology），G・H・ミード以来の象徴的相互作用論（symbolic interactionism），ガーフィンケルのエスノメソドロジー（ethnomethodology），さらには，フランス構造主義の影響を受けた構造主義社会学（structural sociology）などがあるし，ドイツには，これら意味学派の伸張に対抗して，パーソンズのアイディアを拡大発展させたルーマンの社会システム論もある。また，わが国でもとくに80年代以降，こうした仕事に触発された新しい動きがいろいろ生れている。

これらの学派には，共通の特徴がある。(1)構造＝機能分析に対する批判から出発して，(2)「意味」（社会現象の意味的な側面）を重視する。その手がかりとして，(3)既存の社会学に取り込まれていなかった，今世紀に入ってから社会学の隣接分野で発達したアイディアにいろいろ刺激を受けている，という特徴である。構造＝機能分析が，あまりに性急に一般理論を樹立しようとしたため，人間が社会を生きるリアリティをうまく摘出できていない，という印象を人びとに与えてしまった。その反動で，意味学派が現れたのは当然だった。が，それが四分五裂しているのは，どれもやはり難点を抱えていて，構造＝機能分析にとって代わる，オールラウンドな議論になっていない，ということである。

それはともかく，いまもいろいろなかたちで発展しつつあるそれぞれの学派は，隣接のどんな学問から養分をえているのだろうか？

★シュッツ　ウィーンで生れ，アメリカに亡命した社会学者。ドイツの哲学者フッサールの唱えた現象学を，社会学の研究に導入し，現象学的社会学の基礎を築いた。彼は，後期フッサールの「生活世界」の考えに注目する。われわれ人間は，日常生活以外にも科学や夢や宗教体験など，数多くの現実（多元的リアリティ）を生きるが，そのうち日常生活が至高の現実となる，とする。日常生活者の自明な態度が，社会を支えているという事実の指摘は，新鮮だった。

1　現象学から現象学的社会学へ

社会的現実をどうとらえるか

まず，現象学。現象学は，20世紀哲学の，もっとも大きな潮流の1つである。創始者は，フッサールというドイツの哲学者。そのあと，ハイデッガー，ヤスパース，メルロー＝ポンティなどの人びとに受け継がれた。

この現象学を学んで，社会学の理論に作り直したのが，シュッツである。

現象学は，もともと何をテーマにしているか。それは，現実の構成，すなわち，もっとも要素的な与件（たとえば，感覚的な所与）から，われわれ人間の経験している，意味のある世界が，どのようにできあがっていくのかを問題にする（意味のある世界のなかには，他者たちや，森林や家屋や畑や，あらゆる事物，いっさいの現実が含まれる）。そうすると，そもそも人間が意味を構成する能力をもっていることが，社会的現実が成立するための根本的な条件である，ということになる。つまり，人間が社会的現実を構成するから社会が存在するのであって，その逆ではない。構造＝機能分析がいったみたいに，社会があるから，人間がそれを認識できるというのは，まちがっている。

人間一人ひとりが意味を構成していくのは，社会が成立する以前の（あるいは社会と関係ない）場所ということになるから，そこに社会のコントロールは及ばない。そのため，この社会の現実と一致しないような，何通りもの現実を生みだすことができる。夢や，宗教や，神秘的な体験のようなものがそうだ。誰もが知っている，日常の社会的現実は，それらのなかで1つだけ。これを「至高の現実」という。

現象学的社会学は社会学か

シュッツはこのように，現象学の力を借りて，人びとがめいめいさまざまな現実を抱えて社会を生きていることを明らかにした。その一方，現象学が，これまでの社会学とうまく接合するのか，という疑問がのこる。

フッサールの現象学はもともと，超越論的主観性（日常の自分

1991-15-3/6

1991-15-4/6

を見つめる，もう一人の抽象的な自分）の立場に立って，世界を一から見つめなおし，現象として記述するものだった。そして，他者たちや社会の存在を，なぜ信じることができるのか，とことんつきつめられた。こうして現象学は，「社会があることを，一人の人間がどうやって信じる（経験する）のか」を記述することができる。でも，「そのような人間たちが集まると，なぜほんとうに社会ができるのか」を説明することまではしない。

社会は，おおぜいの人間の集まりである。現象学はそれを，ある一人の人間から見たところとして，問題にできるだけだ。

現象学的社会学は，現象学ともちろん同じでない。けれども，一人の人間が，人間が社会をどう経験するか，という側面に焦点をあてる点は，同じである。するとやはり，これは議論の一面であって，そのもう半面——特定の視点（主観）からみたところでなしに，社会を客観的にモデル化する方法論——も必要ではないかと思われてくる。たとえば，なぜ人びとが構成するさまざまな現実のうち，1つだけが「至高の現実」（日常）として共有されるのか。社会を意味あるものとして経験するのは，たしかに個々人なのだが，意味には，客観的な，制度としての側面もあるはずだ。

2　人類学からゴフマン，エスノメソドロジー，構造主義へ

機能主義の人類学

その点，たとえば人類学は，ある社会をまるごと外からながめるための方法論なので，役に立つ。社会学にも大きなインパクトを与えてきた。

人類学も，昔はかなりいい加減な学問だった。19世紀後半の人類学者，たとえばフレイザーみたいな人は，書斎に閉じこもって現地報告や旅行記に読みふけり，「未開人とはこういうもの」と勝手な理論をこしらえた。お話としてはおもしろいが，ほんとうにそうであるという証拠がない。こんなのを「安楽椅子人類学者（armchair anthropologist）」という。

1920年代に，マリノフスキーという人類学者が出てきて，それまでの人類学のあり方を批判した。いい加減な旅行記のたぐい（2次資料）をうっかり信じてはだめである。人類学者が自分で調査に出かけ，異文化のありのままの姿を，自分の眼でみとどけなければいけない。そう主張して，トロブリアンド島（ニューギニアの近くの島）に住み込み，立派な調査報告を書き上げた。

それ以来，人類学者は，アフリカやアマゾンの奥地だろうと，どこにでも出かけて行って，その社会の人びとと一緒に生活し，言語も習得して，それから研究をすすめるのが常識になった。これを参与観察（participant observation）という。

マリノフスキーやラドクリフ＝ブラウンなど，1950年代ごろまでに活躍した学者たちが，機能主義（functionalism）の人類学を築きあげた。構造＝機能分析のヒントになったのは，この学説である。どの社会の制度・儀礼・風習も，外部の人間によく理解できなくても，それなりの存在理由があるはずだ。機能主義は，そう考えて，それを機能とよぶ。その土地の人びとの生活が，機能によって結びついたまとまり（社会システム）になっているとわかれば，その社会を解明できたことになる。

1991-15

レヴィ＝ストロースと構造主義

さて，1950年代を境に，構造主義が台頭してきた。その主流は，機能主義が英米系だったのに対し，フランスの人類学。中心人物は，レヴィ＝ストロースである。

レヴィ＝ストロースは，デュルケーム，モースといったデュルケーム学派の人びとの影響を受けているので，最初にその話からしよう。

社会学者のデュルケームは，『宗教生活の原初形態』（Durkeim, 1912）などを著し，「未開社会」の「宗教」のあり方を考察した。彼によれば，社会を，ただ個々人の総和だと考えてしまうことはできない。人びとが集まって社会をかたちづくると，プラス・アルファのなにか（社会的事実）が生れる。宗教もそのようなもの，つまり集合表象にほかならない。

デュルケームの甥，モースは，「贈与論」（Mauss, 1923-24）を著し，「未開社会」で贈与や交換がどれだけ重要なものかを強調した。彼によれば人類は，必要なものを手に入れたくて交換を行うのではない。交換することそれ自体が目的なのである。

レヴィ＝ストロースは『親族の基本構造』（Lévi-Strauss, 1949）で，このあとを受け，構造主義の親族理論（女性の交換説）を樹立した。

もう少し詳しくみよう。それまでの機能主義は，親族組織を母系／父系に分類したりするような研究方法しかとっていなかった。それに対してレヴィ＝ストロースは，そもそもなぜ親族を人類が営むのかという根本的な問いを立てた。この問いに対する解答が，

「女性の交換」である。彼は，親族組織（外婚単位）の成立と，インセスト・タブー（近親相姦禁忌）の成立とは同じ現象の表ウラではないか，と考えてみた。禁忌される女性／結婚できる女性，の区別は，交換へさし出される女性（姉妹）／交換によって獲得される女性（妻），の区別にほかならないのではないか。もともと女性としては違いのない人びとのあいだに，こうして恣意的に対立をもちこむと，そこに意味上の違い（姉妹／妻）が生じてくる。このように，人間関係を分節して組み立てられるのが，親族現象だ。これは人間社会に特有の現象で，いわば自然と文化の境目になっている，とレヴィ＝ストロースは考えた。女性を交換（コミュニケーション）する——これが，人間というものなのである。

この親族研究は，ソシュールやヤーコブソンの，構造主義の言語学をヒントにしたものである。同じ方法論にもとづいて，レヴィ＝ストロースはこのあと，神話研究でも大きな業績をあげた。

興味深いのは，彼がこれらをふまえ，「コミュニケーションの一般理論」を構想したことだろう。これによれば，人間の社会は，物財／女性／言語の，三重の交換システムにほかならない。たとえば「未開社会」では，それは，贈与経済／親族／神話，なのであった。現代社会もそうやって分析できるかどうか，はっきりしないが，たとえばボードリヤールの消費社会論などは，そうした試みの1つと考えられよう。

人類学の研究方法

人類学者は，右も左もわからないまったく未知の社会に飛びこ

1991-15-5/6

んで，その社会の成り立ちを解明しなければならない。これまで暮らしていた，自分の社会の常識は通用しない。そんなものがあると，かえって研究の妨げになる。いったん頭を白紙に戻し，よその惑星に降り立ったみたいなつもりで，調査地（フィールド）に入っていく。理論はそのあとで考える，というのが人類学のやり方である。

同じ研究方法を，現代社会でもやってみたらおもしろいではないか。そう考えた社会学者がいたとしても不思議でない。

たとえば，ゴフマン。彼はもともと，太平洋海域をフィールドにする人類学者だった。同じやり方を，アメリカに帰国して試してみたら，ユニークな社会学ができあがった。

ガーフィンケルの始めたエスノメソドロジーも，よく似たアイディアである。この学派は日常の対人関係の研究を得意にし，会話分析の方法を編みだした。誰が話の口火を切るか，話が途切れた時にはどうするか……そういう細かな観察を積み重ねて，発言の順番とり（turn taking）に関する規則を発見した。発言者のあいだの力関係や，男女差別の有無についても，この方法で研究することができる。

そのほか，ダブル・バインドで有名なベイトソンとか，経済人類学に大きな足跡を残したカール・ポランニーなど，社会学が注目している人類学のアイディアはたくさんころがっている。また，山口昌男，中根千枝，青木保，川田順造など，人類学での仕事をふまえ，現代社会について興味深い発言を続けている論客もおおぜいいる。

★ウィトゲンシュタイン　ウィーンで生れ，イギリスで活躍した哲学者，思想家。20代，ラッセルのもとで学び『論理哲学論考』を著す。言語を世界の「写像」であるとするこの書は，論理実証主義の運動にも影響を与えた。後期の彼は，初期の立場を乗り越え，言語ゲームの思想に到達。人間のあらゆる行為（ゆえに社会）を，暗黙のルールに支えられた言語ゲームだ，と理解した。後期の思想は，哲学，倫理学，政治学，法学をはじめ，社会学にも大きな影響を及ぼしつつある。

3　現代哲学からルーマン，言語行為研究，意味学派へ

マルクス主義，実存主義など，冷戦時代に魅力をもった哲学が，70年代以降に凋落していったあと，現代哲学は分裂と混迷の度を深めている。そのなかで，いま日本で影響力を保っているのは，英米系の言語哲学，フランスのポスト・モダン哲学の2つである。

ウィトゲンシュタインと言語の哲学

英米系の哲学から，目立つところをひろっていこう。

まず，ウィトゲンシュタイン〔★〕。この人物は，『論理哲学論考』(Wittgenstein, 1922) を著し，論理実証主義運動のリーダーとみなされた。また後期の彼は，言語ゲーム (language game) を提唱している。言語ゲームの意味するところをひと口で語るのはむずかしいが，社会のいたるところに，ルール（規則）に従ったふるまいを見出していくアプローチ，といえるだろう。

ウィトゲンシュタインの影響もあって，その後の英米哲学は，言語の使用を反省する分析哲学や，日常的な言語の使用を問題にする日常言語学派などに発展していった。

そうしたなかで，目立って重要な仕事をしたのが，オースティンである。彼は，言語を，発話行為 (speech act) の産物と考えてみた。すると，言語を，伝統的な真／偽の区別以外にも，約束や宣言，態度表明など，一種の社会的行為として分析できることがわかる。そうした行為の効力を保証するのは，社会的文脈にほかならない。

こうして発話行為論は，言語を行為に結びつけ，社会現象として研究する道を開いた。このアプローチの延長上に，サールやグライスらの，言語行為の哲学的分析がある。こうした研究は，社会学，倫理学，社会心理学，コミュニケーション論などに基礎を与えるものと，期待されている。

そのほか，最近社会学者によく読まれている哲学者に，懐疑論のクリプキ，正義論のロールズ，『形式の法則』(Spencer-Brown, 1969) を書いたスペンサー＝ブラウンなどがいる。

ポスト・モダンの哲学

一方，80年代は，わが国でも，フランス構造主義以降の，ポスト・モダン哲学の影響がいちだんと強まった時期だった。歴史学のフーコー，哲学のデリダ，精神分析のラカンやクリステヴァ，リゾーム（根塊）の概念で知られるドゥルーズとガタリなどが広く読まれている。とりわけ，フーコーが『言葉と物』(Foucault, 1966)，『監獄の誕生』(1975)，『性の歴史』(1976-84) などで見せた鮮やかな手並みは，社会史の資料にもとづいて具体的に社会を考察していくことの有効性を，あらためて気づかせてくれた。

コラム 4・自己言及性

クレタ人のエピメニデスが「すべてのクレタ人は嘘つきだ」と言ったというパラドックス，「ポスター貼るな」というポスターのように，自分自身への言及はしばしば矛盾を生み出す。集合論による数学の基礎づけを考えていたラッセルは，この矛盾を避けるため，対象言語（言及される言語）とメタ言語（言及する言語）を区別する「階型理論」を採用した。しかし，論理学者のゲーデルが，数学は自分が無矛盾であることを決して証明できないことを証明してしまったので（不完全性定理），問題は振出しに戻った。この，現代思想界の重大事件は，社会学と無関係でない。社会がなぜ成立しているのかを考えると，その根拠が，社会が成立しているという事実それ自身であることに行き当たる。この問題を中心に据え，社会システムの成り立ちを考える学者に，ルーマンがいる。わが国でも，今田高俊や大澤真幸の議論が，この問題を追究している。

こうしたポスト・モダン哲学との関係で，独自のシステム理論を活発に展開しているのが，ドイツのルーマンだ。

ルーマンは，パーソンズ亡きあとを継いで，一般理論へ挑戦する果敢な学者として，わが国の読者も多い。最近の彼は，「複雑性の縮減」を主題とする社会システムの概念を提唱している。これは，統計熱力学のプリゴジンの「散逸構造論」や，生物学のヴァレラとマトゥラーナのオートポイエーシス（自己生成）の理論などを下敷きにしたもので，社会システムを従来のように決定論的にとらえるのでなく，自己組織的なものとしてとらえ，機能の観点から統一的にその挙動を説明しようとする試みだ。

なお，ルーマンは，法，経済をはじめ，愛情の歴史，一般システム論など，社会学以外の隣接分野にまたがった仕事をしているので，彼の業績を理解するのには，そうした分野への目配りも欠かせない。

1991-15-5/6

1991-15- 6/6

4 隣接社会科学から社会学へ

最後に，社会学以外の社会科学から，社会学にどのような影響が及んでいるかを，簡単に整理しておこう。

経済学からの刺激

社会科学のなかで，ずっと社会学の手本になってきたのは，経済学である。

「パレート最適」の概念によって，経済学者として著名なパレートは，社会学者としても大きな仕事を残している。たとえば，パーソンズが均衡の概念を得たのは彼を通してである。

サムエルソンに代表されるような，新古典派の一般均衡理論は，エレガントな数理モデルとして，社会学的インスピレーションの源泉になっている。これをもっとも意欲的に社会学に取り入れようとしたのは，小室直樹の一連の仕事で，構造＝機能分析の日本における発展の1つの方向を作った。

もう1つ，忘れてならないのは，ゲームの理論である。フォン・ノイマンとモルゲンシュテルンが1930年代に唱えたこの議論は，たちまち理論経済学の共通財産となった。ゲームの理論は，プレーヤーが効用関数をもつなど，単純で強い仮定を置くことで，明快な結論を導くものだが，「囚人のジレンマ」「超ゲーム」などのように，社会学的にも興味深いケースを多く扱っている。そのため，数理社会学でも中心的な研究テーマになっている。

そのほか，きれいな結論で知られているのは，アローの「一般可能性定理」である。これは，古くから知られていた「投票の逆

理」を，一般の場合に拡張したものと考えればよく，個々人の価値観を尊重する民主的で合理的な社会的決定（社会的厚生関数）が存在しえないことを証明している。この定理にもとづいて，社会的選択理論という分野が，社会学と経済学の境界領域に誕生した。

そのほか，アダム・スミス，リカード，ケインズなど，経済学の巨人たちの業績は，社会学的に重要な議論を多く含んでいる。

そのほかの学問分野

心理学も，一貫して社会学の模範となってきた。得られたデータを分析する方法論は，心理学がいちばん発達しているからである。

心理学では，テストの結果を相関行列に直し，因子分析などの技法によって，その結果を説明する要因を発見していく，という方法をよくとる。社会学でも，アンケート調査の結果を分析しようとする場合に，心理学の方法は参考になる。

数量化理論などの統計技法も，実証研究には非常に役立つ。

法学，政治学などと社会学との交流は，最近あまり活発でない。けれども，政治学であれば丸山真男，法社会学であれば川島武宜の業績は，社会学者にとってきわめて有益であり，社会学を専門とする者は必ずふまえなければならない内容となっている。

日本独自の学問として，民俗学を忘れてはならない。柳田国男，折口信夫らの業績は，日本の農村社会，民衆文化，宗教などを考えるうえで，必読である。

1991-15 6/6

そのほか，精神分析では土居健郎の『甘えの構造』(1971)，経済史では大塚久雄の『共同体の基礎理論』(1955)，哲学では廣松渉の『世界の共同主観的存在構造』(1972)，在野の研究者では吉本隆明の『共同幻想論』(1968) など，日本の社会学者が必ず読んでいる文献は数多い。

4 まとめ

このように社会学は，昔も今も，隣接するさまざまな学問から養分を吸収してきた。研究の途中で行き詰りを感じたら，社会学以外の学問に目を向ければ，きっといいヒントがつかめるだろう。われわれの先輩も，みなそうしてきたのだ。

ただし，むやみやたらに知識を詰め込むのは感心しない。問題が起ってから，調べてみるのでもいいと思う。要は，柔軟な発想で，使える議論は何でも使うことだ。

それでは，あなたが有能な探偵として，首尾よく社会の謎を追いつめるように祈っている。

〔ブックガイド〕

隣接分野の本を片端から読み始めたらきりがない。特に重要なものを掲げよう。

▶経済学では，まずサムエルソンの『経済学』(岩波書店)。版を重ねている標準的な教科書だ。これ一冊でたいてい間に合う。そのうえで，A. スミスの『諸国民の富』(岩波文庫)，リカードの『経済学および課税の原理』(岩波文庫ほか)，マルクスの『資本論』(大月書店ほか) など

の古典が，やはり重要。ケインズの『雇用，利子，および貨幣の一般理論』(ケインズ全集 7，東洋経済新報社) も，社会学のヒントになるところが大きい。

▶言語学では，ソシュールの『一般言語学講義』(岩波書店) が重要だが，丸山圭三郎の『ソシュールの思想』(岩波書店) のほうが分かりやすい。チョムスキーの『文法の構造』も名著だが，邦訳は絶版になっている。記号学では，パースの著作が基本的。

▶人類学では，レヴィ＝ストロースの『野生の思考』(みすず書房) を勧めたい。構造主義の名著だ。機能主義の立場に立って読みやすいものとしては，中根千枝『タテ社会の人間関係』(講談社) がある。

▶哲学では，フーコーがすぐ役に立つと思う。『言葉と物』『監獄の誕生』『狂気の歴史』(いずれも新潮社) など，わが国の若手研究者にも大きな影響を与えている。フッサールや，メルロー＝ポンティ，サルトルも，好んで読まれてきている。

▶戦後日本人の著作としては，政治学者，丸山真男の『日本政治思想史研究』(東京大学出版会) が，日本軍国主義の分析として優れており，しかも読みやすい。フェミニズムでは，上野千鶴子『家父長制と資本制』が，欧米の学説をまとめていて信頼がおける。伝統的な日本社会の研究としては，吉本隆明『共同幻想論』(角川文庫ほか) が面白いだろう。

◆橋爪大三郎

1991-15 6/6